

平成二十六年二月一日 発行

和漢比較文学会

# 和漢比較文学

第五十二号  
平成二十六年二月

源氏物語における末摘花の造型

——金剛醜女説話の受容について——  
無題詩の系譜——忠通から家実へ……  
今井 友子……1  
大木 美乃……19

公開シンポジウム「日本近代文学と中国」研究報告

芥川龍之介「杜子春」と唐代伝奇「杜子春伝」とのあいだ

——唐代伝奇「杜子春伝」の出典と編者を中心として——  
増子 和男……35

上海から来た人——谷崎潤一郎『蓼喰う虫』を中心に  
宮内 淳子……48

若き荷風と中国  
——「上海紀行」における漢詩表現に関する一考察——  
錢 曉波……60

書評

金文京著『李白——漂泊の詩人 その夢と現実——』……松原 朗……72

平成二十五年度大会・例会・特別例会研究発表要旨

集報……116 88

## 若き荷風と中国

## ——「上海紀行」における漢詩表現に関する一考察——

錢 曉 波

明治三〇年（一八九七）三月、四五歳の永井久一郎（号禾原、来青）は文部省會計局長の職務を辞し、四月、

日本郵船株式会社に移り、上海支店長に就任した。五月、久一郎は上海へ単身赴任したが、三ヶ月後東京に戻り、一ヶ月の滞在後、東京を引き上げ、妻の恒、長男壮吉（荷風）、三男威三郎と共に再び上海に赴いた。

これは永井荷風の初めての外遊である。家族と共に上海で四ヶ月あまり生活した荷風は「上海紀行」と「滬遊雑吟」（漢詩）二つの作品を残した。帰国後、上海を舞台にした小説「煙鬼」<sup>エンゴイ</sup>を創作し、懸賞小説の受賞により文壇ではじめて脚光を浴びた。

「上海紀行」は永井荷風の「処女作」である。この紀

行文は明治三十一年（一八九八）二月二六日の高等師範学校附属尋常中学校、桐陰会発行の『桐陰会雑誌』第三号の「文苑」に発表されており、文体は漢文訓読体の擬古文である。

約五千字余りの文章は「小序」「入黄浦江」「滬北洋場」「申江壯観」「上海県城」「邑廟内園」「也是園」「遊四馬路」の八つの部分からなっている。西洋化された租界や、城壁に囲まれた古い街並み、浦東の長閑の田園風景など、清朝末の上海の概況を荷風なりの視点で紹介している。漢文訓読体の文体は難読であるものの、漢文漢詩の創作技巧が用いられ、読み応えがある文章である。

## 二

この上海への旅は、明治八年（一八七五）に郵便汽船

三菱会社（後の日本郵船）が開設した横浜―神戸―長崎―上海の定期航路を利用したようである。永井荷風が一人先に横浜から船に乗り、神戸へ行き、神戸で陸行してき

作ったこの擬古文は、ときに中国語表現も混じり、诗情あふれる文彩豊かな文章である。たとえば、下線の文は李白の「峨眉山月歌」の風情と非常に似ている。

三菱会社（後の日本郵船）が開設した横浜―神戸―長崎―上海の定期航路を利用したようである。永井荷風が一人先に横浜から船に乗り、神戸へ行き、神戸で陸行してきた家族と合流し、共に長崎入りして、そこからさらに上海に赴いたのである。乗った船は神戸で荷積みをするため二日間停泊したため、荷風はその間を利用して京都、大阪の名所を見物し、人生初めての旅行を大いに楽しんだという。

「入黄浦江」は長崎港から出発し、上海の「母親河」と呼ばれている黄浦江に入るまでの風景や、感想を記したものである。

長崎港から出発する際の風景について、荷風は次のように綴った。

我が輪船長崎港を出づ夜正に七点鐘黄昏山と水を埋  
尽して淡煙茫茫四方漸く黒し只見る泊船の灯火乱点星  
の如く峨眉山上―輪十六夜の月影瓊浦の水に入て流る  
相思川上多少の楼台遠く歌吹の音を聞く

この一節の冒頭の文章から見てわかるように、荷風が

作ったこの擬古文は、ときに中国語表現も混じり、詩情あふれる文彩豊かな文章である。たとえば、下線の文は李白の「峨眉山月歌」の風情と非常に似ている。

峨眉山月歌 [唐] 李白

峨眉山月半輪秋 峨眉山月 半輪の秋

影入平羌江水流 影は平羌江水に入て流る

夜発清溪向三峽 夜 清溪を發して 三峽に向ふ

思君不見下渝州 君を思へども見ず 渝州に下る

平羌江は青衣江とも呼ばれ、中国四川省にある峨眉山の北東のふもとを流れる川のことである。峨眉山の名称をそのまま用いているが、平羌江を「瓊浦」に替えたのである。「瓊浦」とは長崎市の旧称「瓊ノ浦」のことで、いまも名称として存在している。

「峨眉山月歌」は「詩仙」李白の夥しい詩作の中でも比較的有名な一作である。「夜清溪を發して三峽に向ふ」という状況も、夜長崎を發して上海に向う荷風の当時の状況と似ているので、「峨眉山月歌」の詩句をアレンジして用いるにはふさわしいのである。ほかに「黄昏山と

水を埋尽して淡煙茫茫四方漸く黒し只見る泊船の灯火乱  
点星の如く」「相思川上多少の楼台遠く歌吹の音を聞く」  
などもよく用いられる漢文表現を和文体にしたもので、  
テンポがよく、「上海紀行」の冒頭の一節としてインパ  
クトが強い。

荷風の記述はさらに次のように続く。

小史悄然船上に孤立すれば九月の新涼風は露を含む  
多し知らず清衫已に湿ふを水夫時に鐘を叩くこと十一  
点気冷又冷小史乃船房に入て眠る暗潮枕を打て篷窓に  
泣く急短夢幾度か回る頭上の電気燈光青く孤客の瘦影  
黒く壁上にあり

乗船した荷風の所感である。「悄然」「孤立」「孤客」  
「瘦影」などの表現が目立ち、十九歳の青年の文章にし  
ては幾分気取りが感じられ、精一杯の背伸びの感がぬぐ  
えないが、中国古典文学によくある「孤」「愁」などの  
要素や、主題がにじみ出ている。傍線の文は明末清初の  
詩人呉梅村の詩作からの引用だと思われる。

したことの無い中国と実際に触れ、上海の各地を回った。  
まず荷風に強烈な印象を与えたのは上海の「租界」で

口占贈蘇崑生 [清] 呉梅村  
楼船諸將碧油幢 楼船の諸將 碧油の幢  
一片降旗出九江 一片の降旗 九江に出づ  
独有龜年臥吹笛 独り龜年 臥して笛を吹く有り  
暗潮打枕泣篷窓 暗潮 枕に打て篷窓に泣く

呉梅村は即ち呉偉業のことである。清朝の代表的な詩  
人とされ、叙事詩など長編の古詩で名を馳せている。上  
記の「口占贈蘇崑生」は友人の蘇崑生に贈った四首のう  
ちの一首である。この詩は明の滅亡についての感傷的な  
情緒をあらわしているが、荷風の引用は元の詩の歴史的  
背景とは関係なく、ここでは表現のみを借用している。  
長崎から上海までの航路はさほど遠くはないが、乗船  
中の荷風は時化に遭い、船酔いに苦しんだようだ。船は  
揚子江に入り、「水漸く平なり」、舟山島などを通過して、  
「我輪船横浜を發して七日漸く黄浦江口呉淞に達す」の  
である。

上海の埠頭に降り立った永井一家は大勢の人に迎えら  
れ、立派な馬車に乗って港近くの日本郵船の社宅に到着。  
それからの四ヶ月、荷風はこれまで漢籍などでしか接触

雨戯作詞」の表現を用いている。

したことはない中国と実際に触れ、上海の各地を回った。

まず荷風に強烈な印象を与えたのは上海の「租界」である。「滬北洋場」と名付けられた節で、イギリス、アメリカ、フランスの租界のそれぞれの現状や特徴を記録した。「滬」は上海の別称で、現在も使われている。「滬北」はつまり上海の北部である。「洋場」は「租界」の別称であり、当時上海は「十里洋場」とも呼ばれていた。例えば、イギリス租界について荷風は次のように記した。

英租界は中央の大部樓閣亭台最も美に大に殆滬上の勝を占む戲園（芝居）酒樓茗館花園又皆此処に存す英租界四馬路の如きは更に七年の夜雨嘗て知ざるの処十里珠簾二分明月筆の書し口の言ひ尽す可からざるの景たり

英租界にある「四馬路」の繁栄ぶりについて、荷風は「七年の夜雨嘗て知ざるの処十里珠簾二分明月」の表現を用いて描写した。この一文には三作の漢詩からの表現の借用が見て取れる。

まず「七年の夜雨嘗て知ざるの処」は陸游の「冬夜聽

雨戲作詞」の表現を用いている。

冬夜聽雨戲作詞 [宋] 陸游

透檐点滴和琴筑 檐を透る点滴 琴筑を和す

支枕幽齋聽始奇 枕を支へて幽齋に聴きて始めて

奇なり

憶在錦城歌吹海 錦城の歌吹海に在るを憶ふ

七年夜雨曾不知 七年の夜雨 曾て知らず

陸游のこの詩は、四川で七年ほど勤務した後、隠棲生活に入る時に作られたものといわれている。「錦城」は「錦官城」とも呼ばれ、現在の中国四川省の成都のことである。「憶在錦城歌吹海 七年夜雨曾不知」は、「七年间も錦城の賑やかさを経験したが、夜雨はこれほど趣のあるものとは知らなかった」の意味で、錦城の繁栄ぶりを引き立てる詩句である。

「十里珠簾」という表現は蘇軾の「吉祥寺賞牡丹」にある詩句をとったことばではないかと思う。

吉祥寺賞牡丹 [宋] 蘇軾

人老簪花不自羞 人は老いて花を簪し 自からは

羞ぢず

花応羞上老人頭 花は応に羞づべし 老人の頭に

上るを

醉婦扶路人応笑 醉婦 路に扶けられて 人応に

笑ふべし

十里珠簾半上鈎 十里珠簾 半ば鈎に上せらる

「珠簾」とは「玉の簾」のことで、閨房の窓をさして

いる。「珠簾」はよく使われる漢詩表現の一つで、上記の蘇軾の詩作以外も多くの漢詩に使われている。たとえば、謝朓の「玉階怨」、杜牧の「贈別」、岑参の「白雪歌送武判官帰京」などである。

荷風は「四馬路」について、「上海紀行」の最後の節でも紹介しているが、この「四馬路」は現在の上海市福州路のことで、書肆、出版社、印刷所が多く、「文化街」と呼ばれているところである。また、一九四九年以前は娼館や妓楼が集中し、歓楽街、花柳街として名を馳せた所でもあった。したがって、「十里珠簾」の表現は「四馬路」の当時の景観と合致している。

さらに「二分明月」の表現は徐凝の「憶揚州」からとつたものではないかと思う。

憶揚州 [唐] 徐凝

蕭娘臉下難勝淚 蕭娘の臉下 涙に勝へ難く

桃葉眉頭易得愁 桃葉の眉頭 愁を得易し

天下三分明月夜 天下三分す 明月の夜

二分無頼是揚州 二分は無頼是れ揚州

「天下三分明月夜 二分無頼是揚州」は、「天下の明月の夜の美しさを三分とすれば、その二分はすでに揚州が占めている」という意味である。徐凝のこの詩はタイトルからすると中国の古都であり、名勝地である「揚州」の景色を讚えるものと思われがちだが、内容を読むと、実は揚州の女性を懐かしむものだとわかる。したがって、荷風がこの表現を「四馬路」に用いたのは、景観も女性も懐かしみ、その両方を重ねた表現を意図したかったからであろう。

この「十里珠簾二分明月」、ほぼ同様の表現は、荷風自身が創作した漢詩にも用いられている。明治三二年

(一八九九年)十一月十五日に「新小説」に発表された「溼上春遊二十絶」(存十首)のなかの第八首に、その表現が使われた。

離れていない「好立地にある。「仏蘭西風の灰色した石造り」の二階建てで、一階は応接間と食堂、二階は父親久一郎の書齋と寝室、「そのいづれからも坐ながらに

(二八九九年)十一月十五日に『新小説』に発表された「滬上春遊二十絶」(存十首)のなかの第八首に、その表現が使われた。<sup>3)</sup>

西洋化された滬北洋場の都市風景を見たあと、荷風は黄浦江対岸、つまり浦東の田園風景に目を投じた。自ら足を運び、浦東を散策し、「寔に一江を隔つる上海と観異なる幾何」と感嘆した。

「申江壯観」の節では浦東の当時の風景や、黄浦江の朝夕の景観について記している。「申」は「滬」と同様に、上海の古称である。「申江」はつまり黄浦江のことである。

小史寓楼三菱公司後館は江に面して景甚佳夜に入るや泊船橋頭尽く青燭紅燈を点ず正に天上の星と相乱れ幾丈の金蛇長く江上に横はる時に大月あり風露凄涼清輝江城に満ち鴻雁一声天涯に聞く汗漫の遊をなすの客子腸尚断つ江上泊船の人正に何等の感を作す者ぞ

上記は荷風が日本郵船の杜宅から黄浦江の夜景を眺望したときの所感である。杜宅は「埠頭から二、三町とは

離れていない」好立地にある。「仏蘭西風の灰色した石造り」の二階建てで、一階は応接間と食堂、二階は父親久一郎の書齋と寝室、「そのいずれからも坐ながらにして、海のような黄浦江の兩岸が一目に見渡される」<sup>4)</sup>。荷風は裏手の一室を与えられ、上海滞在中はその部屋で生活していた。

この一節には漢詩でよく用いられるさまざまな表現が点在している。そのなかの、「清輝江城に満ち」の一文では、李白の長詩「送王屋山人魏万還王屋」にも同様な詩句がみられる。

送王屋山人魏万還王屋 「唐」李白

(略)

秀色不可名 秀色 名すべからず

清輝滿江城 清輝 江城に満つ

(略)<sup>5)</sup>

「清輝」はよく用いられる漢詩表現の一つである。太陽の光あるいは月光のことをさしている。そのほかに、この一節には「金蛇」「鴻雁」「天涯」「汗漫」「客子」

「断腸」など、漢詩に多用される表現が多く、漢文読み下し体で書かれてはいるが、漢文に復元すれば漢詩そのものになるような文体になっている。

租界は限りなく西洋の街並みに似せて造られているが、一方、従来の上海の古い町並みも依然として保たれ、「西洋」と古い中国が同じ都市内に共に存在するといふ奇妙な形になったのである。租界が確立された当初は、中国人と西洋人の居住地域が分断され、いわゆる「華洋別居」制度が徹底されたが、太平天国の乱（一八五一年〜一八六四年）に呼応して蜂起した秘密結社小刀会（一八五三年）の上海侵攻をうけ、多くの中国人が難を逃れて租界に逃げ込んだのをきっかけに、「華洋雑居」の形が許されるようになった。しかし、「雑居」といっても、中国人の租界への出入りが多くなる一方で、西洋人が上海の古い街で暮らすことは稀であった。この状況は荷風が「上海景城」の一節で記述したものを読んでもわかる。

古申城（黄浦乃申江に面するを以て申城又春申城と云）は法租界（ふらんす居留地）に接し城中市街花園及官邸鋪市等あり四方高壁を囲し六箇の門あり現在尚

夜十時を以て門を闔し人をして出入せしめず道路家屋皆中国固有の風を存す外人不潔と称して入らざるも中部の樓亭及花園等に至つては実に建築の宏大に驚ざる可からず多年惜哉修めざるが故に今や画棟朝飛珠簾暮捲の觀を失せるも一見誰れか当年の状を思量せざる者あらんや

多くの漢籍を通して、荷風が中国の歴史的建築物から受けた印象は相当つよいものであったと思われる。傍線部の文章を読んですぐに思い浮かぶのは、人口に膾炙する唐の詩人王勃の「滕王閣」の詩句である。

滕王閣

〔唐〕王勃

滕王高閣臨江渚

滕王の高閣 江渚に臨めり

瓊玉鳴鸞罷歌舞

瓊玉鳴鸞 歌舞罷んぬ

画棟朝飛南浦雲

画棟朝に飛ぶ 南浦の雲

珠簾暮捲西山雨

珠簾暮に捲く 西山の雨

閒雲潭影日悠悠

閒雲潭に影りて 日に悠悠

物換星移幾度秋

物換り星移りて 幾度の秋ぞ

閣中帝子今何在

閣中の帝子 今何くにか在る



檻外長江空自流 檻外の長江 空しく自ら流る

荷風は「滕王閣」の名句を用いて上海県城のかつての盛況ぶりを再現し、その景観がすでに失われたことを惜しんでやまなかつた。それはまさに王勃が詠じた「物換り星移りて幾度の秋ぞ」の叙情的心情と同様である。

上海の県城内をしばらく散策していると、邑廟に着く。邑廟は即ち「城隍廟」である。「城隍」は道教の神で、城内を管轄し、住民の生活を守る役割を有している。「城隍廟」は土着の神を奉ることから、その一帯は特に賑やかであつて、さまざまな伝統的な民俗芸能が集中している。ゆえに、荷風の「我東京浅草寺前の如く」との比較は適切である。

上海の古い県城の状況を一通り紹介した後、紀行文はさらに「邑廟内園」「也是園」と続き、最後に「遊四馬路」と題された短い節で念を押すかのように「四馬路」の繁栄ぶりをもう一度強調している。

「上海紀行」の最後には、「以上記す所の外上海遊ぶ処多し愚園徐園張園楊樹浦等挙ぐるに暇あらず号を追て記す可し」云々と書かれているが、後続の文はとうとう

書かずじまいになった。しかし張園や、徐園に対する印象はかすかに残っていたようで、四十年近くの時を隔てて書かれた「十九の秋」に一言ずつ感想が記されている。

### 三

「邑廟内園」の一部の文章と後節の「也是園」に関する紹介文は、清葛元煦が撰じた上海案内記である「滬遊雜記」にある文章と極めて近似していることが、真銅正宏氏の綿密な調査によつてわかつた。荷風は、いわばその部分の漢文を読み下しの文体に「翻訳」しただけのことである。

小論では「上海紀行」にある借用と思われる漢詩表現の出処について少々考察を行ったが、真銅氏の確証のある調査と比べ、元の詩作に基づいて文章を作つたという確かな根拠がなく、あくまでも参考例として挙げたものである。列挙されている漢詩の中には、唐代や宋代の名作のほかに、清詩もあつて、幅広いものである。

漢詩の習得の経歴について荷風は次のように述べている。「漢詩の作法は最初父に就いて学んだ。それから父の手紙を持って岩溪裳川先生の門に入り、日曜日ごとに

『三体詩』の講義を聴いたのである<sup>8)</sup>。漢詩創作において表現の受容や借用は作法の一つである。この方法を心得ている荷風は、技巧を駆使して詩情あふれる叙情的な美文に仕上げ、多少の気取りが感じられるが表現の装飾には力を入れている。この耽美的な作風は処女作の「上海紀行」ですでに強く感じられたものである。

一八六六年（慶応二年）に前島密が『漢字御廃止之議』の建白書を將軍徳川慶喜に上申した出来事が代表しているように、その後の明治期において、学問の象徴だった漢語文化は難しい立場に立たされることになる。明治期における漢語文化の様相や立場については多くの論者によって研究され、明治二十年前後を境として徐々に衰退していくことがあきらかにされている。「明治十二年生まれの荷風は、明治期全体の漢語文化の消長の歴史から見ても、実に微妙な端境期に位置した世代であった<sup>9)</sup>」。真銅氏がいつているように、荷風以降の世代では、漢語文化が徐々に疎遠になり、ついに「文人趣味」という自娛の世界に閉じ込められたのである。

下火になりつつある漢語文化に対し、なぜ荷風が執着するのか。儒学者である外祖父鷲津毅堂や、漢詩人であ

る父親永井久一郎の家系的な影響が非常に大きいことはいうまでもない。一方、荷風の性格にある不遜な部分も大いに関係しているのではないかと思う。少年時代から漢学の教養にとっぷりと漬かってきた荷風のような旧型の文人にとって、漢語文化は単なる趣味というより、自身の生活態度を示す一種の道具のような役割を果たしていたと思われる。それは時代の先端に奮迅することを拒否し、自ずから時代の最後尾に身をおき、悠然と人生を漫歩する荷風の文人氣質のあらわれではなからうか。荷風が亡き親友の井上唾々について感慨深く思い出し、存命中の唾々の言動を書き記した一幕は象徴的なものである。「唾々」晩年には専漢文の書にのみ親しみ、現時文壇の新作等には見向きだもせず、常にその言文一致の陋なることを憤っていた<sup>10)</sup>。時代を逆走する頑固者の姿である。井上唾々が「不願醒客」と号したのもそれと同様な趣がある。

荷風は唾々とは無二の親友である。と同時に、俗世に對する態度、価値観にも似たような部分が多い。荷風は家庭教育によって受けた漢語文化の「伝統」を拒否はしなかった。しかしながら、自身の中における儒学の「伝

統」を破壊し、超越することはできたといえよう。

「荷風が」一貫して、文壇の流行に従わず、天下の大勢に付和雷同せず、決して批判精神を失わなかった」と加藤周一が評しているように、荷風は、時代を傍観するれっきとしたアウトサイダーの姿勢を、終生貫いたのである。

#### 四

後年、永井荷風は渡米と渡仏を果たしたが、欧米での生活は荷風文学に大きな影響をもたらした。一方、家系や父親の影響で幼少時から漢文漢詩を習い、漢学の素養の深い荷風だが、生涯において中国を訪れたのは十九歳の時、四ヶ月あまりの上海の旅のみであった。荷風としては「このまま長く上海に留って、適当な学校を見つけて就学したいと思った」<sup>(10)</sup>が、希望が許されず帰京せざるを得なかった。一九五九年に逝去するまでの七九年間の荷風の人生で、再び中国を訪れることはなかった。機会に恵まれなかったのか。それともほかに原因があったのか。今となって知る由もないが、とにかく惜しまれることである。

荷風の文学人生には興味深いことがある。それは、荷風なら心酔する漢文学をモチーフに多くの創作の可能性があったにもかかわらず、中国を舞台にした本格的な小説は習作期の「煙鬼」の一作にとどまっていることである。

この創作の空白について、如何に理解するか。入谷仙介氏の指摘によれば、実地の観察は小説の創作にとつて大事な段取りだと荷風が考えるため、「接触を失って観察できなくなれば書けなくなる」<sup>(11)</sup>。確かに荷風は「小説作法」で次のように述べている。

読書思索観察の三事は小説かくものの寸毫も怠りてはならぬものなり。読書と思索とは剣術使の毎日道場にて竹刀を持つが如く、観察は武者修行に出でて他流試合をなすが如し。読書思索のみに耽りて世の中間実地の観察を怠るものはやがて古典に捉はれ感情の鋭敏をかくに至るべく、己が才をたのみて実地の観察一点張りに行くものはその人非凡の天才ならぬ限り大抵は行きづまってしまふものなり。<sup>(12)</sup>

その時代の職業作家の規範を荷風は唱えている。一種の「ものづくり」精神というべきものである。

実地観察がなければ書けないという入谷氏の結論に加え、荷風の「支那趣味」観も上述の創作の空白と関係するのではないかと思う。

荷風にとつての「支那趣味」は単に自娛の世界に閉じ込められた狭義的な文化の概念にすぎず、その趣味に照らされた理想の世界は現実の中国とほとんど切り離されたものである。たとえば荷風は長坂石球の例を持ち出して次のように語った。「翁は支那へ行かれたことはないのであるが支那の詩文を深く愛して、その愛読した明清の書物の上に現れた所に依つてその書齋と客間を総て支那風に造られたのであつた<sup>(16)</sup>」。行ったことがなくても書物から単に形を模して自我の世界を築くことができたのである。それとほぼ同様な意識を荷風はもっている。文学創作の角度からいえば、漢詩の芸術的表現にしか感興が沸かず、それにのみ心酔している。しかし、荷風はやがてその表層的な芸術の限界を感じたのであろう。

荷風は「王昭君」と題された劇詩を創作したが、未完のままに終わった。また、白楽天の長詩「琵琶行」から

趣向を借りて一幕の劇「秋の別れ」を創作したが、それも不評のようであつた<sup>(16)</sup>。「王昭君」について、荷風は「人間は精神上の悲哀に瘦せ衰えて美しく死にたいと思つても、肉体と云う別なものがあつて、そう思うように詩的の最期を遂げる事が出来ない」と云う心持を暗示しよう<sup>(17)</sup>と創作の主意を説明しているが、作品の完成の部分を見ると、文体や表現は確かに芸術の香りが高いが、技巧のみ先行するような感じが拭いきれず、荷風自身が語っている作品の主意はいまひとつ理解し得ないのである。

本質から逸脱した形骸化の芸術の生命力が十分に衰弱の運命を免れず、それを目の当たりにした荷風はそれ以降中国を舞台にする創作をとりやめ、漢詩の世界をより一層趣味の域にかたく閉じ込めたのである。

### 〔注〕

(1) 永井荷風「十九の秋」

(2) 永井荷風「上海紀行」。傍線は筆者によるもの。以下同。

(3) 永井荷風「溷上春遊」

黄昏転覺薄寒加 載酒又過江上家 十里珠簾二分月 一

湾春水滴堤花

- (4) 前掲注(1)
- (5) 長詩であるため紙面の関係で全詩の引用を省く。
- (6) 前掲注(1)。「張園の木の間に桂花を簪にした支那美人が幾輛となく馬車を走らせる光景。また、古びた徐園の廻廊に懸けられた聯句の書体。薄暗いその中庭に咲いている秋花のさびしさ」。
- (7) 真銅正宏「永井荷風の出発期再考—漢文体との関わりから」『和漢比較文学』一九九四年二二号 四二、四三頁
- (8) 永井荷風「十六、七のころ」
- (9) 前掲注(7)
- (10) 永井荷風「梅雨晴」
- (11) 加藤周一「『荷風全集』刊行によせて」
- (12) 前掲注(1)
- (13) 入谷仙介「永井禾原荷風父子の上海体験—一八九七年秋」『山口大学文学会誌(45)』一九九四年二二号 四二頁
- (14) 永井荷風「小説作法」
- (15) 永井荷風「現代と支那趣味」
- (16) 松田良一「日和下駄」論—「平維盛」から「日和下駄」へ『相山国文学』一九八七年三月 二頁
- (17) 永井荷風「王昭君」

(せん きょうは・中国 上海 東華大学)